

平成28年度から、尿自動分析装置による検査がスタート

いよいよ新年度から、当協会における尿検査が自動分析装置を用いた報告となります。『えっ？今までは、機械を使って検査していなかったの？』と、驚かれる方も多いと思いますが、創立以来これまで50年余り、当協会は尿検査を自動化するという選択をしてきました。

世の中の多くの病院や健診・検査機関が、尿検査で自動分析装置を用いているのになぜそうしなかったのかと言えば、ひとえに当協会で扱う検体の数が多いにも多かつたからです。多い時には1日で（正確に言うと、検体は午後から搬入されますから半日で）1万件以上の検査結果を出さなくてはならない、これは大学病院でさえも足元にも及ばない数であり、学校検尿という期限の定められた短い期間で大勢の検査を担うことができる数少ない専門機関の宿命でもありました。しかしながら時代は進み、検査をする機械の性能が向上したことに加え、健診機関を取り巻く周囲の環境も大きく変わったため、導入を決定しました。

話が少しそれますが、そもそも尿検査は、紀元前400年ギリシャの医師ヒポクラテスの時代から行われていました。尿の量や色調を肉眼で観察することからはじまり、科学的な分析が行われたのは19世紀以降のことで、尿を加熱したり薬品を加えることで、糖やタンパクを見つけることができるようになりました。例えば糖が存在すれば試薬が反応して、その試薬が別の反応を誘導して発色する、という具合です。この一連の反応を試験管の中ではなく、試験紙を使って見ることができるようになったのが『試験紙法』であり、学校検尿をはじめとする健康診断における尿検査で必ず行われる最初の検査法です。



新たに導入する尿検査の自動分析装置は、この試験紙に尿を自動で滴下し、発色具合の判定を高精度カラーCCDセンサーで読み取り画像解析を実施するというものです。人の眼で見て試験紙の色調判定をすることがなくなることで、これまで以上に精度の高い結果報告が可能となります。同時に尿検体には、個々を識別するためのバーコードを貼付することで、検査結果はオンラインで情報処理されることから、結果報告の迅速化にも貢献します。さらにこれを機に、尿容器の提出用袋を紙からビニール製チャック袋にすることで、検査を受けられる皆様の衛生面にも配慮しました。



採尿容器提出袋

変更にあたりまして、特に初年度はご不明な点もあるかと思いますが、当協会は常に進化することを意識し、受診者皆様のお声を傾けたより良い健診を提供することができるよう尽力してまいります。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

西部検査所 健診検査課 課長補佐 永田 美智

第44回学校保健セミナーを開催

当協会と静岡県学校保健会共催の第44回学校保健セミナーを、平成28年2月18日に静岡県男女共同参画センター「あざれあ」にて開催した。講師には、静岡県立こども病院こころの診療部長兼こころの診療センター長である山崎透先生をお迎えし、県内全域から参加した養護教諭等120名の方々が、「不登校の理解と支援」と題された講演に熱心に耳を傾けた。



講演では、「不登校」という言葉は、あくまでも「学校に行かないという現象」を指しているものであり、「不登校」の背後に何があるのかを見極めて対処することが必要、というお話がまずあった。「不登校」はストレスの対処行動であり、いじめなどの人間関係から身を守る為の回避行動や、両親に関心を持たれたいという無意識の行動などの場合がある。また、背景に精神疾患があるならば、治療が優先されることもあり、発達障害が認められる場合には、支援に工夫が必要になってくる。

次に、「再登校」することは、大人が人間関係などの原因により休職し、復職することと同じくらいハードルが高く、大人が職場を変えることより、子どもが転校することの方がより大変だということを理解する必要がある。

「不登校」と「再登校」にかかる時間は子どもによってそれぞれなので、大人は焦らず、子どもが焦っている時にはうまく引き止めるなど、状態をよくよく見極めて支援をすることが大事である。たとえ「再登校」できたとしても、「再不登校」への不安から、絶対に休めないというプレッシャーを自分にかけてしまうと「過剰反応」が見られる場合もあるので、「一日休んでもまた学校に行ける」と思えるようになるまでは気をつける必要がある。

ある子に上手くいった方法が、必ずしも他の子どもにとっても良い方法という訳ではないこと、発達障害をもつ子だけでなくみんなが生きやすい環境を提供することが、より良い学校づくりになることなど、長年、児童精神に携われてこられた講師からは、引きこもり時期の支援、高校進学にむけての支援、また発達障害などのタイプ別の支援の要点など多くの示唆に富む話がされ、学校での今後の指導や生活支援に大いに役立てられる内容であった。

講演後の質疑応答も活発で、盛況のうちにセミナーは閉会した。

キャリア・ガイダンス

「はたらく人の話を聞こう」講話に参加して



昨年12月に常葉学園橘中学校2年生の総合学習キャリア・ガイダンス「はたらく人の話を聞こう」に講師として参加した。

講話の趣旨は、将来の進路や職業をできるだけ沢山の選択肢の中から選ぶことができるように様々な職業に関する情報や知識、またどのように自分の未来を決めていくのか先輩の話を通して「働く」ということに対してのイメージを具現化することだ。

講師の依頼を受けたときは、まだ社会人2年目、駆け出しの状態に人に伝えられるようなことはとてもないと思ったが、私が携わっている「人々の健康を守る」という仕事についてや、卒業した夜間主コースの大学のことを少しでも知ってほしいと思い講師をお引き受けした。

講師は私のほかに3人。旅行会社の営業マン、スポーツ選手、舞台俳優ととてもバラエティーに富んだ講師陣となった。

話し始めるにあたり、まずは私が勤務する静岡県予防医学協会とはなにをしている団体なのか、というところから説明を始めた。「毎年皆さんの尿を回収しています。」と言うと生徒の顔が少し緩んだ。そこからは健康診断について、県下全域の市町や企業・学校を回っていることや使用している健診車の紹介、この協会に就職しようと思ったきっかけや日々の業務で苦労すること、大変なこと、それに負けないやりがいを紹介した。

また将来の進路を選択する上で、通常の昼間コースだけでなく夜間主コースという選択肢もあることを知ってほしいと思い大学での思い出も少し紹介させて頂いた。10代から70代までの幅広い年代の学生が毎夜一緒に勉強する環境にいた私は、同年代からは得られない刺激を多く同級生から頂いた。

今回生徒たちへ講師という立場でお話をさせて頂いたが、今回の経験を通して今までの自分自身を振り返り、健康でいることの大切さや、相手のことを考えて常に行動できていたか、今一度仕事に対する姿勢について見つめ直すきっかけになった。

まだ彼らの将来の進路に関する選択は先かもしれないが、いつか仕事に就く際に私の話を少しでも思い出してもらえたらとても嬉しく思う。

藤枝健診センター 舟山 咲紀

藤枝市主催「子どものUターン就職を考える」セミナーに参加して

去る12月19日に、県外の大学等へ進学した女子学生やこれから県外へ進学を考えている女子高生等の保護者の方々を対象に、藤枝市主催の「女子学生の保護者向けセミナー 子どものUターン就職を考える」がサンライフ藤枝で行われました。



藤枝市は人口減少・少子高齢社会への対応として、藤枝市内の企業への女性の雇用・就業機会の創出効果を高め、人材確保・活性化を目指しており、この一環として当セミナーを計画されたそうです。

このセミナーに、私は「先輩女性社会人が語る体験談」への依頼を受け参加しました。

私は、県外の大学へ進学し、就職は静岡県へ戻るUターン就職を選択しました。就職活動に当たっては、静岡県へのUターンやIターン就職を希望する学生等を対象に静岡県が就職支援を行う「静岡UIターン就職サポートセンター」を活用し、面接の練習や履歴書の添削、企業紹介、就職に関する悩みや疑問の相談等のサポートを受けました。

同サポートセンター及び今回のセミナーは、それぞれ静岡県及び藤枝市が㈱東海道シグマに事業を委託しており、その縁で就職して1年足らずの私に体験談の依頼が来ました。

セミナーでは、株式会社NOKIOO（ノキオ）取締役で中小企業診断士の小田木朝子氏による「これからの時代を生きる娘のために、親が学ぶ「地元就職のメリット」」をテーマにした講演が行われました。講師の小田木氏は、Uターン就職をし、結婚、出産を経てベンチャー企業を創業した方です。

今回のセミナーには、「娘に地元に戻ってきてほしい。そのヒントを得たい。」「就職を控える娘のために、有用な情報を得たい。」と考えている多くの保護者の方が参加し、熱心に質問も飛び交い、盛況のうちにセミナーは終了しました。

総合健診センター ヘルサポート 山本 朋慧